

余白を振り返る



「意図せず偶然に出会ったもの、自分で掴み取ったものの記憶に勝るものはありません」(8ページ)



「一度立ち止まって、大学で学ぶ意義や、自分は何を学びたいのかを考える。まさに、余白の時間です」(12ページ)



「失敗しても教員が口出しせず、信頼して待てばよいことを、生徒たちから学びました」(15ページ)



「教員にできることは、安心して発言し、楽しんで学べる教室の環境づくりぐらいだと感じています」(20ページ)



「ゴールとはあくまで、ある時点で仮決めしたものであり、書き換えていくものだと考えています」(24ページ)



「町を歩きながら感じた、“今、面白そうなところ”に足を向ける」(28ページ)

余白を振り返る



「私たちの思う余白とは、誰に決められる
のでもなく、そうした自分の時間を生きるこ
と」(35ページ)



「行き当たりばったりのキャリアが、振り返
ってみると数珠つなぎのようにつながり、す
べてに意味があるように見えるから不思議
です」(38ページ)



「『ちょっと一回手放して、今いる場所から
離れてみる』ことの効用に気づきました」
(41ページ)



「なんの気なしに来てみたら心に余裕がも
てていた」(29ページ)



「その弱さを開示することで、周り
の人の強みや優しさを引き出して
くれる」(31ページ)

決めること、 決めないこと。

特集「余白が生む未来」をご覧いただきありがとうございました。どのような感想をおもちになりましたでしょうか。

日頃取材を行うなかで、「余白」という言葉や付随する考え方が、頻度高く話題に挙がることに気がつき、「学ぶ」「働く」の両面から余白について探ってみることにしました。捉え所の難しい「余白」という概念。編集部としては、いつもとはやや雰囲気異なる誌面になったように感じています。

特集を通して感じたことは、すべてを「余白」で固めるべきということでは決してなく、決めることと、決めないことのバランスの取り方にヒントがあるように感じました。決めてしまいたくなる気持ちをグッと抑え、決めない領域を意図的に少し創り出し、勇気とワクワクをもって手放す。そこから生まれた「余白」は、受け手に戸惑いと探索をもたらし、その人らしい思考や行動へと自然と導いていく。結果として、送り手も受け手も予想しなかった着地を生み出すことにつながっていくのかもしれませんが。

決めること、決めないこと。難しさを感じつつ、私たちも模索していきたいと思います。

赤土豪一(本誌 編集長)